

# ノヴゴロド大主教の白頭巾<sup>(1)</sup>

— 14—15 世紀のノヴゴロドと地中海世界 —

松 木 栄 三

## I

中世ノヴゴロドの大主教はモスクワ府主教その他のロシア諸主教とは異なり、正教信仰の正統な統率者たることの印として白い頭巾<sup>(2)</sup>をかぶっていたという伝説的な物語がある。物語はノヴゴロド地方を中心に 16～18 世紀のロシアに広く分布し、ごくポピュラーなものだった<sup>(3)</sup>。粗筋は次のようなものである。

この白頭巾はもともとコンスタンチン大帝（306～337）がキリスト教への改宗の後に、

---

(1) この小論は『地中海論集』第 XI 号に掲載した “Novgorodian Travelers to the Mediterranean World in the Middle Ages,” *Studies in the Mediterranean World, Past and Present. Collected Papers Dedicated to Kin-ichi Watanabe, Tokyo, 1988, pp. 1-34* の第 3 節を簡略化し同時に一部加筆変更したものである。

(2) ここで白頭巾と訳したのは *belyi klobuk*. *klobuk* とは東方正教会の主教、修道士および白僧では司祭身分のみがつけることを許された聖職用の被り物で一般には冠状の *kamilavka* (ギリシャ語の *kamelaukion* から) とその下に着けるヴェールで首の周りが左右と後の三方に帯状になってたれている布から成っている。*klobuk* は通常黒色であるが、16 世紀のイヴァン 4 世時代以来モスクワ府主教（1589 年以後には総主教）だけが特権的地位の象徴として白い *klobuk* を着用した。ピョートルによる総主教制の廃止とともにロシアの総ての府主教がこの白頭巾を着用する権利を受けた。総主教制が復活した後現在もロシアの総主教と府主教は白い *klobuk* を被っている。参照：M. Roty, *Dictionnaire Russe-Français des termes en usage dans l'église russe*, Institute D'études slaves, Paris 1980, pp. 44, 49.

(3) 現存する物語の写本は大別して長短 2 系統およそ 250 ほどが知られているが、19 世紀以来 *Povest' o Novgorodskom belom klobuke* の名で A. A. Nazarevskii (Kiev, 1912), N. I. Kostomarov (S. Peterburg, 1861), D. E. Kozhanchikov (S. Peterburg, 1861) などにより刊行されている。ここではコストマロフのものだけを挙げておく。N. I. Kostomarov (ed.), “Povest' o Novgorodskom belom klobuke,” *Pamiatniki starinnoi russkoi literatury*, izdavaemye grafom Grigoriem Kusselevym-Bezborodko, Vypusk pervyi, S. Peterburg, 1860, pp. 288-300. 刊行されたテキストは以来ロシア中世文学者や中世史家の研究対象になってきたが最近の最も体系的・本格的な研究としては N. N. ローゾフおよび M. ラバンカによる以下の著作があり、この小論もこれらの成果に負うところが大きい。N. N. Rozov, “Povest' o Novgorodskom belom klobuke kak pamiatnik obshcherusskoi pubulistikoi XV veka,” *Trudy Otdela drevnerusskoi literatury instituta russkoi literatury*, Akademii nauk SSSR, t. IX, M-L., 1953, pp. 178-219; idem, “Povest' o Novgorodskom belom klobuke (Ideinoe sodержanie, vremia i mesto sostavleniia),” *Uchenye zapiski Leningradskogo gosudarstvennogo universiteta*, No. 173, 1954, Seria filologicheskikh nauk, vyp. 20, pp. 307-327; Miroslav Labunka, *The Legend of the Novgorodian White Cow. The Study of its “Prologue” and “Epilogue”* (unpublished Ph. D. dissertation), Columbia University, 1978, pp. 1-565.

ローマ皇帝シリヴェストル（314～335）にたいしこの世の最高の宗教的権威の印として、つまり皇帝の王冠に並ぶ聖界権威者の冠として贈ったものである。シリヴェストルとその後継者たちはこれを大いに尊重したが、カール大帝（768～814）と教皇フォルモス（891～896）の頃以後、この真の信仰の象徴はローマにおいては疎んぜられ顧みられなくなった。その結果神の命により白頭巾はヨアンネス・カンタクゼノス帝（1347～1354）の時代にローマからコンスタンチノーブルに移され、同帝と総主教フィロテオス（1353～54, 1364～76）により受け入れられ深く敬われた。フィロテオスはこれをコンスタンチノーブルに留めたかったが、神の声は異教徒による来るべきコンスタンチノーブルの占領を予告しロシアのノヴゴロドに白頭巾を移すよう命ずる。フィロテオスはノヴゴロドの大主教ヴァシーリー・カレカ（1330～1353）に白頭巾を送り、こうして正教の真の権威の象徴たる主教の冠は、ローマ教皇、コンスタンチノーブル総主教の手を経て最終的にノヴゴロドの大主教に委ねられた。それ以来この白頭巾はノヴゴロドの大主教とその地位の象徴となり、ノヴゴロド主教座の特別な権威を示す印となった<sup>(4)</sup>、というのである。

一見して明らかなように、この物語の主題は極めて政治的でもありポレミックでもある。伝説はローマ、コンスタンチノーブルと受け継がれてきたキリスト教的権威の中心がロシアに、それも府主教座のあるモスクワにではなく、その管轄下にあるべき大主教座のノヴゴロドに移されたという主張を含んでいるからである。言うまでもなく15世紀半ば以後ロシアの政治的統合の中心となり、ビザンツ帝国崩壊のあとを受けて東方正教世界の擁護者たるの自負を強めていったのはモスクワである。モスクワをローマ、第二ローマ（コンスタンチノーブル）に継ぐ「第三のローマ」であると説いたプスコフの僧フィロフェイの言葉ほど、この時代（1520年頃）のモスクワの強い自信を端的に示すものは他にない<sup>(5)</sup>。だが「白頭巾」伝説はまさに第三ローマの地位を占めるのがモスクワでなくノヴゴロドだと高唱するのであり、物語とフィロフェイの時間的前後関係の問題は残るにせよ、内容的には文字どおりモスクワの宗教的地位に対する挑戦を意味している。

また白頭巾がコンスタンチン大帝からローマ司教への特権の委譲に歴史的起源をもち、さらにビザンツ総主教のみならずビザンツ皇帝をも仲介者としてロシアに伝えられたとするように、物語の関心は明らかに俗界支配権と聖界権との関係にも向けられている。しかもロシア側の舞台では白頭巾の受け手としてモスクワ大公はまったく登場せず、ノヴゴロドの大主教のみが現われる。この点から見れば、ここには聖界権の俗権に対するある種の優位性の主張が含まれていることも否定する訳にはいかない。

このような内容を含む「白頭巾」物語ははたして何時、誰によって、どのような状況の下

(4) N.I. Kostomarov, *op. cit.*, pp. 288-300; M. Labunka, *op. cit.*, pp. 13-29, 442-492.

(5) モスクワ第三ローマ論については言及する文献は多いがとりあえず I. U. Budovmits, *Russkaia publitsistika XVI veka*, M-L., 1947; Ia. S. Lur'e, *Ideologicheskaia bor'ba v russkoi publitsistike kontsa XV-nachala XVI veka*, M-L., 1960; D. Stremoukhoff, "Moscow the Third Rome: sources of the doctrine," *Speculum*, Vol. 28, No. 1, 1953などを参照。

に作られたのだろうか。また白頭巾のロシア伝播物語にはビザンツ側ではヨハネス・カンタクゼノス帝や総主教フィロテオス・コッキノス<sup>(6)</sup>、ノヴゴロド側では大主教ヴェシーリー・カレカなどが登場する14世紀なかばの時代的背景が現われるのはいったい何故なのだろうか。「ノヴゴロド白頭巾」物語にはじめて本格的に取り組んだソビエトのN. N. ローゾフとアメリカのM. ラバンカの研究<sup>(7)</sup>を参考にしながら、ここでは特に「白頭巾」物語を産み出したノヴゴロド史に固有な政治的背景や文化的特徴に目を向けつつ上記の問題に論及してみることにはしたい。

## II

まず物語中白頭巾がビザンツから伝えられたとされる14世紀なかばのノヴゴロドの歴史的状况について検討してみよう。

14世紀はノヴゴロドにとって政治的にも経済的にもその最盛期であったが、同時にその西と東に急速に台頭するリトワニア及びモスクワとの関係、とりわけ後者との対抗関係が極めて重要な政治的課題として浮かび上がる時代でもあった<sup>(8)</sup>。モスクワの政治的成長がサライのモンゴル汗による支持とともにモスクワに座所を移した府主教との協同に負うところが大きかったように、ノヴゴロドの政治的独立も一つにはノヴゴロド大主教の伝統的な特権を守り、モスクワの府主教及び大公権からの相対的自立性を維持することの成否にかかっていた<sup>(9)</sup>。12世紀以来ノヴゴロド共和体制の頂点に立つ大主教は都市国家としての政治的自立の最良のシンボルだったからである。14～15世紀のリトワニアが絶えずビザンツに働きかけてモスクワとは独立の府主教座の獲得をめざしたように、ノヴゴロドも同様な文脈でコンスタンチノーブルとの直接的な結び付きを積極的に求めた<sup>(10)</sup>。14世紀のロシアが今日に残した四つのコンスタンチノーブル巡礼記ないし旅行記のうち、三つまでがノヴゴロド人に依るものであったのは偶然ではない<sup>(11)</sup>。しかもそのうちの二つは14世紀なかばの有能な政治家

(6) ヨアンネス・カンタクゼノスは著名なヘシカスト思想家のグレゴリオス・バラマスを支持したビザンツ皇帝で、総主教フィロテオス・コッキノスも皇帝の政策の緊密な協力者で同じくヘシカスト派。彼等の特にロシアとの関係についてはJ. Meyendorff, *Byzantium and the Rise of Russia, A Study of Byzantino-Russian relation in the fourteenth century*, London-New York, 1981. 特に総主教フィロテオスについてはpp. 173-199参照。

(7) 前記註3を参照

(8) 14世紀ロシアに於けるモスクワ、トヴェーリ、ノヴゴロド、リトワニアという4つの政治勢力の関係についてはモスクワを中心にするがクラミーの概説書が要領よく簡潔に叙述している。R. O. Crummy, *The Formation of Muscovy 1304-1613*, London & New York, 1987, pp. 29-55.

(9) この問題、特にノヴゴロド大主教(ソフィア聖堂)がノヴゴロド共和制国家の内政及び外交に於いて占めた地位と機能に関する最近の歴史的考察としてはホローシェフの次の著作が重要である。A. S. Khoroshev, *Tserkov' v sotsial'no-politicheskoi sisteme Novgorodskoi feodal'noi respubliki*, M., 1980.

(10) モスクワに対抗して独立府主教座をめざすリトワニアの挑戦については例えば、前掲J. Meyendorff, *op. cit.*, pp. 191-199などを参照。12～14世紀のノヴゴロド主教座のコンスタンチノーブルに対する関係については前掲の拙稿“Novgorodian Travelers to the Mediterranean World in the Middle Ages,” pp. 1-15参照。

であったノヴゴロドの大主教ヴァシーリー・カレカ（巡礼者ヴァシーリー）の周辺で成立したものと考えられる<sup>(12)</sup>。伝説物語中総主教フィロテオスから白頭巾を受け取ったとされるヴァシーリーが、自分自身のコンスタンチノーブル巡礼の経験も含めビザンツ世界に深い関心を持つ人物だったことは疑いが無い。

ヴァシーリーはネレフスキー区の有力貴族ミーシャ＝オンツィフォル家と深い繋がりを持っていた教区司祭出身の大主教で、1330年から1352年にロシアを襲った黒死病で倒れるまで23年間その職にあった<sup>(13)</sup>。東西に台頭する二つの大国のうちどちらとの政治的連携を重視するかをめぐってノヴゴロド内にはリトワ派・モスクワ派両貴族グループの対立が表面化しつつあったが、ヴァシーリーはむしろ両大国の対立を巧みに利用してノヴゴロドの権利を維持・拡大<sup>(14)</sup>、他方でビザンツから直接の理念的支持を取り付ける政策をとった。モスクワ府主教フェオグノスト（ギリシャ人テオグノストス）はコンスタンチノーブルへの献金政策などによりリトワニアやガリーチの府主教座の独立を阻止しモスクワの「全ロシア府主教」としての地位を確保するが<sup>(15)</sup>、ヴァシーリーもステファン一行をビザンツに送り込み同じ手段に訴えてノヴゴロドの立場を守り通した<sup>(16)</sup>。こうしたヴァシーリーの対外政策は奏功する。モスクワ大公とフェオグノストはノヴゴロドへの融和政策の一環として、1346年ヴァシーリー一行をモスクワに招いて歓待しノヴゴロド大主教の特権的地位を保証する。「府主教フェオグノストはノヴゴロド大主教ヴァシーリーを祝福し、十字聖衣（*rizy khrestsaty*）を与えた」<sup>(17)</sup>とノヴゴロド年代記が記録しているのがそれである。マイエンドルフによれば十字聖衣とは当時ビザンツで府主教などの特別の高位聖職者に与えられた四つの十字架で飾られた祭服 *polustaurion* を意味していた<sup>(18)</sup>。モスクワは事実上ノヴゴロドに府主教位と対等な地位を保証することで協力を取り付けようとしたのである。

だが1352年にヴァシーリーが黒死病で死亡し代わって反モスクワ派的色彩の濃いモイセイ

(11) 詳しくは最近14～15世紀ロシア人のコンスタンチノーブル巡礼記を刊行し研究した G.P. Majeska, *Russian Travelers to Constantinople in the Fourteenth and Fifteenth Centuries*, Dumbarton Oaks Studies, 19, Washington, 1984を参照。

(12) ヴァシーリー・カレカについては A.S. Khoroshev, *op. cit.*, pp. 57-67; A.D. Sedel'nikov, "Vasilii Kalika: l'histoire et la legend," *Revue des etudes slaves*, t. VII, 1927, pp. 224-240 など参照。コンスタンチノーブル巡礼記のひとつは一般にヴァシーリー自身のもと考えられているし、もう一つの記録を残したノヴゴロドのステパン一行も大主教ヴァシーリーのもとから派遣された公的使節団であった可能性が高い。N.N. Prokof'ev, "Russkie khozheniia 12-15 vv.," *Uchenye zapiski Moskovskogo gosudarstvennogo pedagogicheskogo instituta im. V. I. Lenina*, No. 363, 1970, pp. 100-120; E. Matsuki, *op. cit.*, pp. 8-15.

(13) V.L. Ianin, *Novgorodskie posadniki*, M., 1960, pp. 334-336.

(14) A.S. Khoroshev, *op. cit.*, p. 63.

(15) フェオグノストについて詳しくは J. Meyendorff, *op. cit.*, pp. 153-161 参照。またモスクワ大公と府主教による献金政策については N.N. Prokof'ev, *op. cit.*, pp. 113-114 を見よ。

(16) マジェスカはノヴゴロドのステパン一行がコンスタンチノーブルの総主教およびハギア・ソフィアにたいしてモスクワと同様な献金を行っていたことを明らかにした。G.P. Majeska, *op. cit.*, pp. 18-19, 30.

(17) *Novgorodskia perviaia letopis' starshego i mladshego izvodov*. M.-L., 1950 (以下 *NPL* と略記) pp. 343-344.

(18) J. Meyendorff, *op. cit.*, p. 84.

が大主教（1352～59）に就任すると、彼はコンスタンチノーブルに使節を派遣してモスクワ府主教による「圧迫」を訴え、総主教と皇帝によるノヴゴロドへの「祝慶」を要請した。モイセイも大成功を収める。1354年ビザンツから戻った使節団は皇帝ヨハネス・カンタクゼノスと総主教フィロテオスから「大いなる恩恵を以て与えられた十字聖衣と金印文書」<sup>(19)</sup>を持ち帰った。前代のヴァシーリーがモスクワ府主教から得た特権を今度はコンスタンチノーブル総主教から保証されたのである。いずれにせよ、14世紀中葉のノヴゴロドの2代にわたる大主教が特権的な主教用の「祭服」を与えられたという歴史的事実、しかもそのうち一度はビザンツ皇帝カンタクゼノスと総主教フィロテオスの許から送られたという事実は、白頭巾物語の所伝と内容的に全く合致する点で大いに注目に値する。実際この聖衣は以後ノヴゴロド教会の独立的地位のシンボルとして地方文献に言及されたりあるいはノヴゴロドのフレスコに描かれたりすることになる。

白頭巾物語を構成するいくつかの源泉の一つにノヴゴロド地方の口承伝説が含まれていたことは全ての学者の意見の一致するところである<sup>(20)</sup>。そしてこの伝説の発生が14世紀中葉の上記の「歴史的事実」に結び付いていたことは疑う余地がないのではなからうか。事実、物語のある写本は白頭巾とともにかの「十字聖衣」もコンスタンチノーブルからヴァシーリーの許に運ばれたとしているのである<sup>(21)</sup>。さらに興味をそそるのは1946年にソフィア聖堂内のヴァシーリーの墓が発掘されたとき十字聖衣の断片とともに「被り物」を飾る種々の宝石類が実際に発見されたこと<sup>(22)</sup>、他方モイセイも何か白い被り物を頭に着けている姿が彼の建立したヴォロトヴォの聖母昇天教会のフレスコに実際に描かれていることである<sup>(23)</sup>。おそらく二人が与えられた十字聖衣の一式には白い豪華な被り物が付属していたのであろう。当時の一般のロシア主教たちが用いた黒い頭巾と対照的なこのノヴゴロド大主教の白い被り物はノヴゴロドの民衆に誇りとともに強い印象を与え、白頭巾物語の伝説的部分を産みだすことになったと思われる。

### III

それから約1世紀を経たモスクワ府主教座の独立（1448）、コンスタンチノーブル陥落（1453）、イヴァン3世とソフィア・パレオゴロスの結婚（1472）、タートルの軛くびきからの解放（1480）など一連の歴史的事件はモスクワを次第に現実の第三ローマに近づけ、1478年のノ

<sup>(19)</sup> *NPL.*, p. 364.

<sup>(20)</sup> 伝説の発生をセジェリニコフ（上記註12参照）はヴァシーリーの時代とするのに対しローゾフはその死の直後としている。

<sup>(21)</sup> *M. Labunka, op. cit.*, pp. 26-27, 31-32.

<sup>(22)</sup> *N.N. Rozov, op. cit.*, pp. 191-192, footnote 2.

<sup>(23)</sup> ストロコフとボグセヴィチは大主教モイセイの像の白頭巾を頭に光輪のある聖者として描かれていると誤解しているが、在世中にモイセイ自身が建立した教会壁画にその様な描かれ方をする事は考えられない。A. Stokov i V. Bogusevich, *Novgorod Velikii*, L., 1939, pp. 92-95.

ヴゴロド併合は白頭巾物語上の「第三ローマ」を歴史の舞台から引き降ろした。だが長期にわたりノヴゴロド大主教の許で培われた自立的な文化伝統は政治的独立ほど急速に失われるものではなかった<sup>(24)</sup>。大主教が大公と府主教の許から派遣される時代になっても、例えばゲンナージーやマカーリーの任期のように、モスクワ的イデオロギーから相対的に独立したノヴゴロドの伝統に依拠した文化的生産活動は続けられたのである。

事実ローゾフとラバンカがほぼ完全に明らかにしたように、現在 250 写本以上も残っている長ささまざまな「白頭巾物語」のオリジナル版は、実はノヴゴロド大主教ゲンナージー・ゴノゾフ（1484～1504）の許で、つまり彼の周囲に形成された知識人グループ（所謂ゲンナージー・サークル）の協同作業の下にノヴゴロド大主教の館で編纂されたものだったのである<sup>(25)</sup>。

モスクワ貴族の出身でチュードフ修道院の掌院からノヴゴロド大主教職に進んだゲンナージーは、自分の周辺に内外の言語知識をもつ当時のロシアの第一級の知識人達、例えばドイツ語・ラテン語に通じ翻訳・通訳・外交の分野で活躍したドミートリー・ゲラシモフ<sup>(26)</sup>、その兄で大主教館におけるサークルの文芸活動全般を監督したソフィア聖堂の輔祭長ゲラシム・ポポフカ、カソリック世界についての豊富な情報を提供しラテン文献の翻訳に従事したスロヴェニア人のドミニコ派修道士ベニヤミン<sup>(27)</sup>、ソフィアに伴ってロシアに亡命しイヴァン3世の外交官として働いたギリシャ人トラハニオティ兄弟<sup>(28)</sup>などを集めていた。これら

24) 15世紀末～16世紀のノヴゴロド文化については例えば D.S. Likhachev, *Novgorod Velikii. Ocherk istorii kul'tura Novgoroda XI-XVII vv.*, L., 1945, pp. 83-97 参照。また 16世紀ノヴゴロドに残存した共和政時代の遺制については M.N. Tikhomirov, *Rossia v XVI stoletii*, M., 1962, pp. 279-283 参照。

25) ゲンナージー及びゲンナージー・サークルについては *Russkii biographicheskii slovar'*, Vol. 4, pp. 396-402; Ia. S. Lur'e, *op. cit.*, pp. 106-112, 232-234; D.S. Likhachev, *op. cit.*, pp. 89-90; J.L. Wiczynski, "Archbishop Gennadius and the West: The Impact of Catholic Ideas upon the Church of Novgorod", *Canadian-American Slavic Studies*, VI, no. 3, 1972, pp. 374-389 など参照。ゲンナージー及びゲンナージー・サークルの活動で特に重要なのは（1）最初の完訳版スラヴ語聖書の完成（2）ユダヤ異端に対する批判（3）教会土地所有のイデオロギー的擁護などである。また白頭巾物語の作成年代・場所・筆者などについては註3に掲げたローゾフの2論文及びラバンカ論文に詳しい。

26) ドミートリー・ゲラシモフについては *Russkii biographicheskii slovar'*, Vol. 4, pp. 467-469 参照。ノヴゴロド生まれのロシア人ないしノヴゴロドで帰化したギリシャ人で司祭の息子と推定される。リヴォニアのドイツ・ラテン系学校で教育を受けヨーロッパ諸国への使節や翻訳・通訳でゲンナージーに仕えたが、ゲンナージー失脚のあとはモスクワの政府の外務官署 (Posol'skii Prikaz) に雇われて同様な仕事を続けている。

27) ベニヤミンについては J.L. Wiczynski, *op. cit.*, pp. 374-389, N. Rozov, "Povest' o Novgorodskom belom klobuke kak pamiatnik obshcherusskoi publitsistiki XV veka", p. 199; A.D. Sedel'nikov, "K izucheniiu 'Slova kratka' i deiatel'nosti dominikantsa Veniamina," *Izvestia otdeleniia russkogo iazyka i slovesnosti akademii nauk SSSR*, XXX, 1925, pp. 219-222 参照。

28) ロシア名で Iurii および Dimitrii Trakhanioti 兄弟。パレオロゴス朝ビザンツの有力貴族の家系の父の Manuelos Tarkhaniotes は皇帝ヨハネス8世(1425-48)の側近としてフィレンツェ教会合同劇に一役かった人物。ユリーはベッサリオン枢機卿の許からゾエ(ソフィア)とイヴァン3世との結婚の条件交渉のため1469年に派遣され、ドミートリーはゾエに伴って1472年にロシアに入った。モスクワ定着以後イヴァン3世の外交官として西欧諸国に派遣されるとともにゲンナージーの文化活動に加わる。宗教上はフィレンツェ会議に忠実で合同派の立場を維持した。M. Labunka, *op. cit.*, pp. 75-76, footnote 1 参照。

ンナー・サークルの人々は14世紀に成立した伝説その他のノヴゴロド資料を下敷きにしつつも、4世紀から14世紀まで1000年に及ぶ白頭巾伝播の物語の諸要素をローマ、西欧、ビザンツのさまざまな伝説、物語、歴史、教会文献などに求めて編纂し構成したのである。

シャルルマーニュと教皇フォルモスの時代にラテン教会の正教からの逸脱が起こったとするのはビザンツ的反ラテニズム文献の伝統であるし、コンスタンチン大帝の改宗やシリヴェストルのための白頭巾創造の部分が広く知られた中世ラテン資料 *Donatio Constantini*, *Vita (Actus) Sylvetri Papae*, *Vita Constantini* 等に拠るものであること<sup>(20)</sup>、また教会権の王権への優越性を説いた部分が Durandus の *Rationale Divinorum Officiorum*(12世紀)<sup>(30)</sup>からの引用であることなど研究者の等しく指摘するところである。

記録文献としての白頭巾物語は通常(1)物語の成立事情を説明し全体の序として機能するドミートリー・ゲラシモフからゲンナーへの手紙(約400語)(2)物語本文(長本約7000語、短本約1300語)(3)物語の発見及び調査の事情とノヴゴロド教会儀式での白頭巾の利用に関するゲンナーの説明(約500語)という三つの部分から成る<sup>(31)</sup>。興味深いのはゲラシモフがローマからノヴゴロドのゲンナーに送った書簡の体裁をとる序の部分で、彼はゲンナーの命を受け白頭巾についての原典資料を得るべくローマに赴きこの地の諸年代記を渉猟したが無駄であったこと、ローマ教会の図書保管係ヤコフと親しくなり説得して情報を得たこと、しかし白頭巾に関するラテン語の古文書は残存せず、コンスタンチノーブル陥落後に亡命ギリシャ人たちがもたらした正教文献のラテン語訳だけが利用可能であること、それらは門外不出の秘密にされていたがヤコフに堅く秘密を守る条件で写す許可をえたこと、コピーは2冊のラテン文献(うち1冊は物語中にも引用される前記 *Rationale Divinorum Officiorum*)とともにロシア人商人フォマ・サーレフに託したこと、などが記されている<sup>(32)</sup>。この序がゲラシモフの本当の手紙なのか創作なのかは詳らかでないが、ゲンナーも(3)の説明文のなかで「通詞のドミートリーはある必要な調査のために2年間ローマとフィレンツェに滞在した」<sup>(33)</sup>と記しているように、ゲラシモフがイタリアに行き構想されていた白頭巾物語の内容構成に必要なラテン文献・資料の収集にあたったことは疑う必要がない。同じ箇所でもゲンナーはローマから帰国したゲラシモフの功に対し褒賞を与え労いの宴を催したと記しており、白頭巾物語の創作ではグループのなかでも特にゲラシモフの役割が重要だっ

<sup>(20)</sup> *Donatio Constantini* (ロシア名 *Psevdokonstantinova gramota*), *Vita Constantini* (ロシア名 *Zhitie Konstantina*) 等のテキストと物語との比較については N.N. Rozov, *op. cit.*, pp. 185-193 参照。

<sup>(30)</sup> *Rationale divinorum officiorum* は中世ラテン世界でごく一般的だったカソリック司祭用の教会儀式ハンドブックで15世紀の後半だけで43版も重ねている。ドミートリー・ゲラシモフはゲンナーの命令でこの書の一部分を翻訳しており、「物語」の序文の手紙(後述)のなかにドミートリーがローマからゲンナーに送ったとされる2冊の本の1冊がこれである。E. Matsuki, *op. cit.*, p. 21 footnote 72.

<sup>(31)</sup> 前掲ラバンカの著作 (*The Legend of the Novgorodian White Cowl. The Study of its "Prologue" and "Epilogue"*) はとりわけ(1)及び(3)の部分の徹底した研究である。

<sup>(32)</sup> M. Labunka, *op. cit.*, pp. 437-441.

<sup>(33)</sup> N.N. Rozov, *op. cit.*, p. 219; M. Labunka, *op. cit.*, p. 494.

たことが印象づけられる。おそらくベニヤミンやトラハニオテス兄弟などグループのカソリック系メンバーの影響で、ノヴゴロドの素朴な伝説に *Donatio Constantini* の様な中世ラテン的要素を加えて潤色する構想ができ、ゲラシモフが収集してきた資料により作品が完成したのであろう。

白頭巾物語の中心テーマは、真のキリスト教的メトロポリスがローマの墮落、コンスタンチノーブルの来るべき没落の後を受け神意によりロシアのノヴゴロドに移されたというものである。ノヴゴロド人だったゲラシモフはいいとしても、モスクワの利益代表として派遣されたはずのゲンナージーがいったい何故このような非モスクワ的・親ノヴゴロド的理念を打ち出したのだろうか。単なるノヴゴロド人インテリの影響とは考えにくい。おそらくその答えは当時イヴァン3世政府がノヴゴロドで押し進めていた教会領の没収・世俗化政策に対する教会人ゲンナージーの強い不満にあった。イヴァン3世はノヴゴロド併合後俗人所領だけでなく修道院領や聖ソフィア大主教領の本格的な没収・世俗化にはじめて手をつけた。この没収事業は1478年からイヴァン3世の死まで25年以上にわたって続けられており、ゲンナージーの大主教在任中及び直前の主な没収では1480年、1500年、1504年のものがある<sup>(34)</sup>。1498にゲンナージーはベニヤミンに命じカソリック側資料に基づいた教会領擁護論 *Slovo kratko* を書かせ、教会領を世俗化する俗権に痛烈な批判を浴びせている<sup>(35)</sup>。恐らくゲンナージーはこれと同じ目的・文脈に於いて「白頭巾物語」を編纂したのであり、ノヴゴロド教会のキリスト教的正統性を示すことで教会領没収政策からの防御効果を期待したのであろう。だが彼等の努力は無駄に終わる。1504年ゲンナージーはある別の理由でモスクワからノヴゴロド大主教を解任され、翌1505年に死亡しているのである。

#### IV

白頭巾物語にはノヴゴロド教会の宗教的正統性の提示というテーマとならんで、教会的権威の世俗的権威に対する優越性というもう一つの理念が含まれている。この点も王権による教会領没収政策への批判という目的に適合している。物語の前半部分がもともとローマ教皇権の王権に対する優位性を根拠づけている中世西欧の *Donatio Constantini* を利用しているのであるから、物語そのもののなかにも教会の権威が俗界の権威に、或いは「白頭巾」が王冠に優越することを直接間接に示す叙述や言葉は散見する。しかしゲンナージーが物語本文の後に付した短文（前記3の部分）は、この理念を実際のノヴゴロド大主教による教会儀式的なかで体現させたことを示す点で一層興味深い。

<sup>34</sup> イヴァン3世によるノヴゴロドの土地没収政策一般については S.L. Veselovskii, *Feodal'noe zemlevladenie v severno-vostochnoi Rusi*, M.-L., 1947; V.N. Bernadskii, *Novgorod i novgorodskaja zemlia v XV veke*, M.-L., 1971. また教会領の没収問題についてはまた N.A. Kazakova, *Ocherki po istorii obshchestvennoi mysli, Pervaia tret' XVI veka*, L., 1970 を参照。

<sup>35</sup> この「小論」については註27の論文及び Ia. S. Lur'e, *op. cit.*, p. 227 参照。

この短文は前段でゲンナージーによる物語の発見と調査、ゲラシモフのイタリアへの調査旅行等に触れたあと、主たる祭日にノヴゴロド大主教がおこなうミサでの白頭巾の儀式上の扱いについて述べ、次いで特に「柳の日曜日」に大主教がロバに乗って行う行進や、有力者たちを招き大主教館で催す宴席での行事が記されている<sup>(36)</sup>。ロシアでは主教が教会儀式でミトラ（主教冠）を用いるようになるのは17世紀以後のことだったから、ノヴゴドロだけの特殊性とはいえゲンナージーがミサでの被り物（白頭巾）の扱いを決めたのはロシア教会儀式史上の一大改変だった。これもゲンナージーの周りに満ちていたカソリック的要素の影響だったとされるが、まだ主教ミサの最中に白頭巾を着けるまでには至っていないのが注目される。

ところでイエスのエルサレム入城を記念する「柳の日曜日」の行事は、白頭巾を着けロバに乗った大主教を俗人権力者（地方長官等）が手綱をとり市中を行進して大主教館と「聖エルサレム入城教会」との間を往復するというものである。これは政権担当者に高位聖職者の馬の手綱取り役（*officium stratoris*）を演じさせることで教権の政権に対する優位を公衆の前に示す意味を持ち、東西の中世キリスト教世界で広く行われた行事である<sup>(37)</sup>。ロシアでは16世紀のノヴゴロドからこの行事が始まったことは以前から知られていたが、ラバンカの綿密な研究により15世紀末のゲンナージー時代に彼のイニシアティブで導入され、同じくノヴゴロド大主教からモスクワ府主教になったマカーリーの時代（1542～63）にモスクワと全ロシアに普遍化されたことが明らかにされた<sup>(38)</sup>。モスクワでは16世紀のイヴァン4世から17世紀末のピョートルまで、毎年ツァーリが府主教ないし総主教の乗る馬の手綱を引いて行進する「柳の日曜日」のページェントが赤の広場で繰り広げられたのである<sup>(39)</sup>。ゲンナージーは恐らくこれもカソリック世界から取り入れたのであるが、もともとの起源は白頭巾物語の本文で利用している *Donatio Constantini* のなかでコンスタンチン大帝自身がローマ主教シリヴェストルにたいして *officium stratoris* を務めたとしていることに遡るのであり、西欧諸国の支配者たちも8世紀から15世紀までローマ教皇に同じことを繰り返していたとされる。

ロバの行列に次いでノヴゴロドの長官、行政官、役人、主だった貴族などを招いて *officium stratoris* を務めた者たちへの報酬の意味を持つ宴席が大主教館で開かれる。ここでも白頭巾の重要性をしめすさまざまな儀式が行われて現保有者たるノヴゴロド大主教の宗教上の権威を顕示し、出席者の前で「白頭巾物語」が読み上げられた<sup>(40)</sup>。このようにゲンナー

<sup>(36)</sup> N.N. Rozov, *op. cit.*, pp. 217-219 (Napisanie arkhiepiskopa Gennadiia); M. Labunka, *op. cit.*, pp. 190-198, 493-500 参照。ロシアで「柳の日曜日」と言われているのは一般には「しゅろの日曜日」と呼ばれているキリストのエルサレム入城記念日のことで、復活祭の1週間前の日曜。ロバにまたがって入城するキリストを近くの民衆が道にシュロを敷いて迎えたという新約の記録による。

<sup>(37)</sup> M. Labunka, *op. cit.*, pp. 245-250.

<sup>(38)</sup> *Ibid.*, pp. 251-256.

<sup>(39)</sup> この点についての詳しくは K. Nikol'skii, *O Sluzhebakh Russkoi Tserkvi byvshikh v prezhnikh bogosluzhebnykh knigakh*, SPb., 1885, pp. 45-97 参照。

ジーの後書き部分の内容も物語の本文と同様に、何よりもまずノヴゴロドの主教と教会こそがローマ及びコンスタンチノーブルから受け継がれた真のキリスト教の正統な後継者であるという主張を基本理念とし、同時に教会権の政権に対する優位性を白頭巾の歴史として、或いはその優位性を体現する教会儀式として表現しようとしたのである。

モスクワ政権はこの物語の好ましい部分、特にキリスト教の宗教的権威の中心がローマの墮落とコンスタンチノーブルの没落によりロシアに移されたという点は積極的に受け入れ、それはやがてヴァシーリー3世時代に「モスクワ第三ローマ論」となって結実する。民衆の面前で府主教の馬の手綱を引いて見せ「信仰深いツァーリ」の役どころを演じて見せるなどのこともよしとした。だがノヴゴロド教会のロシア内での優先権の主張はモスクワにとって不愉快かつ危険なものであり、それゆえ1564年イヴァン4世政府はモスクワ府主教（1589年以後は総主教）に「白頭巾」を着ける権利を与えたのである<sup>(41)</sup>。そして最後に18世紀のピョートルがロシア総主教の権威の抹殺を必要と感じると、総主教制の廃止とともに政府はロシアの全ての府主教に白頭巾の権利を安売りすることになる。

(40) N.N. Rozov, *op. cit.*, p. 219; M. Labunka, *op. cit.*, pp. 311-325, 498.

(41) I.U. Budovmits, *Russkaia publitsistika XVI veka*, M.-L., 1947, pp. 175-179; J. Meyendorff, *op. cit.*, pp. 277-278.

« RÉSUMÉ »

THE WHITE COWL OF THE NOVGORODIAN ARCHBISHOP

Eizo MATSUKI

In this paper, some observations made in the third section of the author's earlier essay, "Novgorodian Travelers to the Mediterranean World in the Middle Ages" (in *Studies in the Mediterranean World. Past and Present*. XI, Tokyo, 1988), are restated in a summarized and modified form. Namely, *The Tale of the Novgorodian White Cowl*, a popular story in medieval Russia, is brought into focus here. This paper is meant, however, not to make any philological analysis of the story, but to briefly sketch the special historical circumstances of Novgorod around the time this popular legend originated in the 14th century and was later completed as a literary work at the end of the 15th century.

The paper has two objectives. The first is to examine the historical background under which the earliest oral tradition part of this story was created

among the Novgorodian people around the middle of the 14th century, probably after the period when the office of the Novgorodian archbishop was occupied by Vasilii Kaleka, who allegedly received the *White Cowl* from John Cantacuzenos and Philotheos (the Emperor and the Patriarch of Constantinople at that time). What is observed in connection with this is the traditional strong inclination of the Novgorodian archbishops to establish a direct relationship to Constantinople in order to maintain their autonomous status and avoid interference by the metropolitans and the grand princes of Moscow.

The other objective is to describe the historical situation in which this tale as a literary work was prepared and written by the so-called “Gennadii circle of learned men” at the end of the 15th century. The important thing is that the primitive oral legend was transformed into an ideological and polemic literary tale, insisting on Novgorod’s special and prerogative status in the Russian Orthodox Church, by Gennadii, the very archbishop appointed and sent to Novgorod from Moscow for the purpose of confirming Moscovite interests in that city. This fact indicates that the religious and cultural tradition of the autocephalous archbishopric of Novgorod did not disappear as easily as its political independence, even after the final annexation of “the Great Novgorod” to Moscow in 1478. Gennadii and his “circle”, which was filled with many Catholic and western-by-birth intelligentsia, compiled this tale using a number of European and Byzantine materials. Trying to prove the religious legitimacy of the Novgorodian church, as well as the superiority of the church authority to the secular one in general, they hoped to defend their church property from the confiscation policy of the Grand Prince of Moscow, Ivan the Great.